

# 群馬県立館林美術館における 教育普及プログラムの開発と実践

奥 西 麻由子

Development and Practice of Educational Art Programs  
in Gunma Museum of Art, Tatebayashi

Mayuko OKUNISHI

## I はじめに

本研究は、群馬県立女子大学紀要35号（2014年）で発表した「富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践」と同様、本学特定教育研究費を活用した、学生による美術館における教育普及プログラムの開発及び実践に関する報告である。筆者は同様のテーマで平成25年度から本年まで継続して特定教育研究費を取得し、群馬県内における美術館での連携事業を進めてきた。

本稿では、美術館の教育普及事業について述べた後、連携事業を四年間行ってきた群馬県立館林美術館との取り組みに焦点を当てる。富岡市立美術博物館の報告では、普段美術館に足を運ばない幼児や小学校低学年の子どもたちを対象に複数のプログラムを考案し、実践をおこなった<sup>1)</sup>。しかし、群馬県立館林美術館では、企画展の内容と繋がりのあるプログラムとして、子どもから大人までを対象とし、より深く展覧会への興味関心を高めることを目的とした。そこで、その実践の過程から、美術館の企画展にちなんだ普及事業の在り方を提示し、来館者の主体的な学びを目指す。

## II 美術館の教育普及事業

### 1. 美術館の教育普及事業

日本の美術館において、美術品の展示・保存・修復といった活動に加え、教育普及が重要だという認識が共有されるようになったのは、1990年代初頭である。武井によれば、この時期に各館において教育普及の推進体制が整えられ始め、美術館の間での情報や経験の共有化が進むきっかけとなったという<sup>2)</sup>。また、武井は、

「この時期に変化がおきたのには、理由がある。一つは、国の教育行政のあり方が、学校教育中心から生涯学習中心の体系へと、移行しつつあったことである。博物館に生涯学習の中核施設という役割が期待され、学校との連携が強調されるようになった。学校でも、鑑賞教育や美術館活用の重要性が語られるようになり、2000年代の学習指導要領に実際に反映された。それらが美術館の外側からの変化の要因だとしたら、内側からの要因もあった。バブル崩壊後の公立美術館は財政状況が厳しくなり、自らの存在理由を問い直さざるを得なかったのである。そのとき日本の公立美術館は、新たな事業の方向性を『教育普及』という領域に見出したのだと考えられる。」<sup>3)</sup>

と述べている。

このような教育普及事業の導入は、これまで専門の見地のみから作品を扱ってきた学芸員や専門家にとっても異なった視点をもたらすこととなった。つまり美術に造詣が深く、興味のある人々だけでなく、館そのものに足を運ぶことの少ない人々にも、生涯学習の観点から幅広く学びを広げていくきっかけとなったのである。当初は作品解説のようなオーソドックスなプログラムが中心であったが、小・中学校の学習指導要領にも地域の美術館を積極的に活用することが示され<sup>4)</sup>、これまで大人を対象としていた事業だけでなく、子どもたちへのプログラムの充実が図られていった。従って、2000年以降に新たに設立された美術館はもとより、今日では多くの公立美術館の運営方針に「教育普及事業」の策定が求められている<sup>5)</sup>。

## 2. 教育普及事業の分類

次に、美術館における具体的な教育普及事業を挙げ、「美術館における教育普及事業の分類」(表1)にまとめた。今日、規模の大小は異なるといえども、多くの公立美術館においておおよそ以下の分類によって事業が展開されているといえよう。

これらの分類はプログラムの内容によって、目的、対象が異なる。まず、事業の活動は大きく鑑賞活動、体験活動、受け入れ活動、アウトリーチの四つに分かれる。Iの「鑑賞活動」にもさらに二つに分かれる。一つ目は、美術館で作品をより深く味わうために、学芸員や専門家、作家本人などから作品について話を聞く、「①主に展示作品」に関するものである。特に展示解説には研修を受けたボランティアの活動も多い。展示解説やガイドツアーは対象によって話を選択し、ワークシートを活用するなどの工夫がみられる。小規模の館ではここに挙げたような細かく対象を絞ることはまれであるが、スタッフの数が比較的多い大きな館では来館者によって対象を設定し、充実したかたちで鑑賞出来る配慮をしている<sup>6)</sup>。二つ目は、企画展や所蔵作品にちなんだ美術以外の芸術作品の鑑賞を行う「②展示作品以外」である。この活動はどの館もさほど多くはないが、コンサートや映画上映、演劇が挙げられる。展示で取り上げた同時期の作家などの作品から、展覧会の追体験をするようなものもみられる。

IIの「体験活動」はさらに単発で開催される「①ワークショップ」と複数回または連続で開催される「②講座」に分かれる。多くの館は①の「作る、話す、演じる、音を奏でる、書く、踊る、館内ツアー(建築・バックヤードなど)」といったワークショップを企画展や常設展のテーマに応じてプログラムに組み込んでいることが多い。具体例を挙げると作家の手法を参考にした作品を作る活動や、展示作品にちなんだ作品を作るといったものである。また、体験活動は必ずしも美術に関する活動に限られないため、そのほかの芸術体験を伴うプログラムも存在する。一方、展覧会等に直接関わらなくとも、美術館という場で体験することを重視した活動や、季節や地域の特色を取り入れたプログラムを考案する館もある。これらのプログラムの多くは、やはり子どもの参加が中心であるが、内容によっては対象を大人に絞り、長時間で活動するものもある。単発のプログラムに対し、職員や外部の専門家と継続的に連携し、「②講座」の開催を行っている館も挙げられる。この場合年間3~10回程度の連続した形式をとり、創作活動などを行う。体験活動の中でも「②講座」の方が、来館者の意欲は高いと見受けられるだろう。

次にIIIの「受け入れ活動」は、主に外部の学生などを受け入れる活動である。その種類は多く、大学生を中心とした学芸員実習、インターン、中・高校生を中心とした職業体験や見学などが挙げられる。この活動は先にも述べた地域の美術館の積極的な活用により、学校機関との連携を強固にすると共に、子どもたちに美術館が身近な場であること、本物の作品にふれることで学びが深まっていく。また、館にとっても来館者の増加を見込める活動ともいえよう。

最後にIVの「アウトリーチ」は、IIIと異なり、館外へ出ていく活動である。例えば所蔵作品のレ

表1 美術館における教育普及事業の分類

活動内容	事業名	実施者	主となる対象
I 鑑賞活動 ①主に展示作品	展示解説	・学芸員 ・ボランティア	・大人 ・子ども（小学生・中学生・高校生） ・障害のある人（耳の不自由な人、目の不自由な人） ・親子（幼児） ・親子（乳児） ・シニア
	ガイドツアー	・学芸員 ・ボランティア	
	シンポジウム	・専門家 ・作家 ・学芸員	・大人
	ギャラリートーク	・学芸員 ・作家	・大人
	映像の上映	・美術館	特に設定なし
②展示作品以外	コンサート	・音楽関係者（主として外部）	特に設定なし
	映画	・美術館	特に設定なし
	演劇	・演劇関係者（主として外部）	特に設定なし
II 体験活動 ①ワークショップ （単発）	・作る ・話す ・演じる ・音を奏でる ・書く ・踊る ・館内ツアー（建築・バックヤードなど）	・職員 ・ボランティア ・外部の専門家 ・大学生 ・専門学校生 ・高校生	・大人 ・子ども（小学生・中学生・高校生） ・障害のある人（耳の不自由な人、目の不自由な人） ・親子（幼児） ・親子（乳児） ・シニア
②講座（複数・連続）	創作体験 その他の芸術活動	・職員 ・ボランティア ・外部の専門家	・大人 ・子ども（小学生・中学生・高校生）
III 受け入れ活動	学芸員実習	・学芸員 ・職員	・大学生
	インターン		・大学生・短期大学生
	職業体験		・中学生・高校生
	ボランティア		特に設定なし
	小・中・高校の見学	・学芸員 ・職員 ・ボランティア	・小学生・中学生・高校生
	友の会活動	・大人	
IV アウトリーチ	学校への出張教室	・学芸員 ・職員	・小学生・中学生・高校生
	他館との連携事業		特に設定なし

ブリカなどを用いて、学校で出張講座を開催したり、他地域の美術館や博物館、異なる文化施設に赴くことで、美術館に気軽に足を運べない人にも身近なものとして感じれらう取り組みである。また、近年では公立の館が連携して一つの館で他館の作品を紹介したりするような試みも見られるようになった。

以上のように、美術館の教育普及事業は数多く存在し、実際の実施状況は各館によって異なるが、2000年を境に次々と充実した展開を見せるようになり、現在では館にとって必要不可欠な事業の一つになっている<sup>7)</sup>。

### 3. 大学と美術館の連携事業の意義

先述の分類で挙げたように、美術館の教育普及活動にはしばしば外部の人がその活動を担うことがある。その一つが大学との連携事業である。インターンや学芸員実習といった学生が受け手となる美術館の受け入れ活動のみでなく、学生自ら主体的に美術館の活動に携わることも重要であり、多くの館が試み、また継続したかたちを築きつつある<sup>8)</sup>。

筆者が学生と共に連携事業を行ってきた群馬県内の美術館は、①富岡市立美術博物館、②群馬県立近代美術館、③群馬県館林美術館、④高崎市立美術館の四館である。①、②、③の美術館は毎年継続して、また④は2014年に一事業を行った。

ここで、美術館との連携事業においては、どのような意義があるのかということを確認しておく必要がある。四つの美術館に共通して言えることは、学生側にとっては、一つ目に大学で学ぶ基礎としての理論、実技を実践として生かす場になること、二つ目に連携事業の内容にもよるが、専門的な知識を有した職員と交流し、実物の作品が存在する中でそれらをどう活用していくか考えるきっかけを提示すること、三つ目に来館者と直接触れ合うことが出来ることが可能となること<sup>9)</sup>が挙げられる。一方、美術館側にとっては、一つ目に他機関との連携を行うことで開かれた施設としての位置づけが高まること、二つ目に時間的、物理的に少人数の職員のみでは実施できないようなプログラムが実施できること、三つ目に学生の新鮮なアイデアを通してさらなる教育普及事業の可能性を見出すことが出来ることが挙げられる。

このように、双方にとって連携事業を試み、また一度きりでなく継続していくことで、より強固な繋がりを持てると共に、互いを刺激することにもなる。ここで重要なことは、長期間にわたり、ゆるやかに連携をしていくということである。年度に一回の取り組みであっても、継続して行っていく事で、館と大学との信頼関係が生まれ、学生にとっても美術館が身近で親しみやすい場所となる。

### Ⅲ 群馬県立館林美術館における連携事業

#### 1. 連携事業の目的

群馬県立館林美術館との連携では、館側から次のような提案があった。一つ目に夏の企画展開催の時期に合わせ、企画展にちなんだ造形体験を伴うもの、二つ目に複数の学生が参加することで、多くの参加者が見込めるプログラムを考案することである。これは前項で挙げた「美術館における教育普及事業の分類」(表1)のⅡの「体験活動①ワークショップ(単発)」に当たるものとされる。館としては年間一回ではあるが、多くの集客が見込める夏の企画展に連携事業を入れることでプログラムの充実を図りたいとのことであった。そのため、企画展を鑑賞した後にプログラムに参加し、鑑賞活動と体験活動の両輪によって美術館での学びを深めてもらいたいという意図がある。筆者もこの提案に賛同し、学生にとっても独立した造形活動で来館者の体験活動を支援するのではなく、企画展と繋がりを持つかたちをとることで、異なった視点から学生たちがプログラムを考案できると感じた。このような打ち合わせを2013年の春に行い、まずは第一回の連携事業を8月に開催することとなった。また、この時に定員を100名にすることとし、多くの参加者に足を運んでもらうことを目指した。

## 2. 実践内容

### (1) 2013年「粘土で自分だけの守り神を作ろう」

#### 【1】 夏の企画展概要「藪内佐斗司 やまとぢから」

平城遷都1300年祭の公式キャラクター「せんとくん」の生みの親として知られる彫刻家・藪内佐斗司の30年以上にわたる多彩な創作活動をまとめた個展である。日本古来の生命観と仏教的世界観を背景に、「たましい」「気」「エネルギー」といった、目に見えない不思議な力を、無邪気でユーモアあふれる「童子」の姿であらわしている。また、動きの一瞬をあらわす彫刻作品は、仮面舞踏団「平成伎楽団」の結成へと大きく発展し、一室にはそれらの仮面を展示すると共に、会期中にはパフォーマンスも行なわれた<sup>10)</sup>。

#### 【2】 プログラム開発の様子

初めての企画展を考慮したプログラムの開発ということで、アートマネジメントゼミ生4年生を中心に、検討を進めた。その際、大学に展覧会担当学芸員と教育普及担当が本学に来校し、事前に展覧会の概要を作品集と共に伝えてくれた。その後、作品集を見ながら、学生同士で検討を重ね、藪内の作品の中で数多く登場する童子を取り上げ、「守り神」を粘土を用いて自身の手で作るというプログラムを考案した。短時間で数多くの参加者を募るワークショップでは、物理的な問題から粘土を素材に用いることは少ない。しかし、今回は彫刻展ということもあり、参加者に粘土の触感を味わってもらいたいという要望が学生側から強く挙げられた。そのため、手に粘土がついても周囲が汚れず、短時間で制作可能な扱いやすい素材の試作を重ね、最終的にはにわ粘土を選んだ。このにわ粘土は素焼風の粘土で色も薄茶色となり、そのまま乾燥させてもひび割れがしにくい。また、学生たちはワークショップの魅力が伝わるようにチラシ制作のために写真撮影を行なった。(図1) さらに事前準備として会場では作った守り神をそのまま持ち帰るのではなく、作品と共に写真が撮れる撮影スポットも考案した。藪内の作品から池をイメージし、蓮に見立てた緑色の紙皿を準備し、そこに作品を載せて風景を楽しんでもらうというものである。ブルーシートや新聞紙などを用いて、身近な素材で会場を作り上げることにした。



図1 大学内での試作、イメージ画像撮影のための会場探し



図2 チラシ

#### 【3】 プログラム概要

はにわ粘土を使って、自分だけの守り神を作る。完成した後は、エントランスに設置したブルーシートの池の蓮の葉っぱに作品を並べ、記念撮影を行う。図2はチラシである。

日	時：8月25日（日）午後1時～4時
対	象：幼児～一般
定	員：100名（先着順）

参加人数：134名（参加115名・見学19名）

参加費：無料

場所：アトリエ（ワークショップ会場）、エントランス（写真撮影会場）

準備・用具：はにわ粘土、新聞紙、粘土板、ヘラ、ブルーシート、お花紙、紙皿、水、カプセル容器

企画：アートマネジメントゼミ4年（4名）

実施学生：アートマネジメントゼミ4年（4名）、3年（2名）

#### 【4】実施当日の様子

当日は6名の学生がワークショップ会場と写真撮影会場で参加者の支援を行った。事前にシミュレーションを行ったことから、交代で場所を変わり、参加者への声掛け、作り方の説明などを行った。すでに4年生は群馬県立近代美術館と富岡市立美術博物館の経験もあるため、来館者へのアプローチや対応はスムーズにいった。また、会場では職員がさらなるサポートを行ってくれたため、100名を超える参加者がいたにもかかわらず、柔軟な対応が可能となった。（図3～6）



図3 撮影スポットの準備をする学生たち



図4 参加者の守り神の作品



図5 蓮の葉に作品を乗せた状態



図6 エントランスにしつらえた池、写真撮影を楽しむ参加者

以下は学生が参加者と交流してワークショップの様子をまとめたものである。

○館内に入ってきて一番始めに目に入るのが「池」だったようで、特にこどもは受付より先にこちらに来るなど、興味のわくディスプレイ方法だったように感じた。

○今回のワークショップについてだけでなく、我々のゼミ・学部についてなどより詳しく尋ね

てくる方もいた。

- 「守り神」という言葉が受け入れられやすかった印象があった。ワークショップの参加をお勧めする際、どの世代の方も、どういったものをつくるワークショップなのかすぐ理解してくれた。家族で来た方のなかには、家族で共通する部品をつけたり、家族の分がそろうことでひとつのまとまりになるような作品が見られた。
- 池に一時たりとも置かずに帰られた方はいなかった。必ず思い思いに葉っぱを配置して記念撮影していた。特に靴を脱げばブルーシート上に上がってもよい、という配慮が良かったようで、ちょっとしたお子さん撮影会になっていた。
- どのくらいの時間で乾くのか、家に帰ったらカプセルから出して乾かした方がよいか、といった質問が割と多かった。県女生の作品を見せると、乾くとどのくらい色が変化するかが伝わりやすかったようで、乾燥後の変化が目で見えてとれるのも良かった点だと思えた。
- なぜこのワークショップにしたのか、といった質問も頂いた。藪内氏の作品展に関わりがあることは知っているようだったが、「守り神」に至るまでや選んだ粘土についてまで、興味深く聞いてくる方もいた。
- 小さい子は粘土をいじることが一番楽しいようで、作品にするにはやはり保護者の方の助けが欠かせなかったように感じた。
- ワークショップを目的に来た方も多く、ご案内する際に「これのために来ました」といった声を頂いた。定員が過ぎた後にもワークショップ目的に来た人がいらっしゃって、参加させてあげられないのが残念だった。

## 【5】 考察

初めての連携事業としては、身近にあるものを十分に活用し、展覧会の企画をさらに楽しんでもらうことの出来るプログラムだったといえる。子どもだけでなく、大人の参加も多くみられ、世代を越えて美術館での造形体験を味わうことが出来たのではないだろうか。粘土は大人になるとなかなか触れない素材であろう。掌におさまる程度の量ではあるが、触覚を働かせてものを作る喜びを見出すことが出来たといえる。

### (2) 2014年「みんなで謎のいきもの図鑑をつくろう」

#### 【1】 夏の企画展概要「夏休み！いきもの図鑑」

変幻自在で驚きに満ちたいきもの世界は、子どもから大人、生物学者からアーティストまでも魅了する不思議な力をもっている。本展示はそのようないきものに焦点を当て、エビやカニの鮮やかな細密画、極細の線が響き合う木口木版画、想像の魚や竜、鏡の中から羽ばたく鳥、樹脂を重ねながら描いた金魚、植物のパーツでできた虫、透き通るガラス細工のような魚など、観察によって得た多彩な表現を通して、自然と人間の親密な交流を紹介した<sup>1)</sup>。会期中には参加作家によるプログラムも行われた。

#### 【2】 プログラム開発の様子

二回目の連携事業では、昨年の様子を受け、同様の形式をとり、多くの参加者に体験を促すものとしてプログラムの企画を行った。本年も担当学芸員と職員が本学に来校し、事前に展示予定の資料等を使用して、学生も交えた打ち合わせを行った。学生にとっては初めて目にする作品も多く、特に現代の作家作品はどのような素材で作られたものなのか一見ただけではわからない精巧な作品も多かった。従っていずれかの作品にちなんだプログラムを考案するという手法ではなく、いきものという大きなテーマから多くの参加者が気軽に体験できるように、モダンテクニックのフロッ

タージュを用いて自由な発想でいきものを考えるという内容を考案した。昨年ワークショップを体験した4年生を中心に、様々な自然素材等を学内から集め、色鉛筆を用いて紙にこすりだし、試作を重ねた。(図7)今回はチラシも学生がデザインし、考案したいきものをちりばめた。また、ワークショップ終了後の写真撮影スポットとして、白衣や手作りの帽子、メガネなどを用意し、いきものの博士になった気分で自身の作品を掲示し、写真撮影の出来る場をワークショップ室内にもうけることとした。

### 【3】 プログラム概要

企画展にちなみ、自然素材等の身近な材料を用いて、フロッターージュの技法で謎のいきものを作り、みんなで図鑑を完成させる。完成作品と一緒に写真撮影を行うことが出来る。図8はチラシである。

日	時：8月23日(土)午後1時～4時
対	象：幼児～一般
定	員：100名(先着順)
参	加人数：114名
参	加費：無料
場	所：アトリエ
準	備：紙、画用紙、フロッターージュ素材(葉、自然物、布など)、ハサミ、色鉛筆、 マーカー、のり
企	画：アートマネジメントゼミ4年(5名)
実	施学生：アートマネジメントゼミ4年(3名)、3年(1名)



図7 学生によるフロッターージュの試作



図8 チラシ

### 【4】 実施当日の様子

当日は4名の学生がワークショップ会場と写真撮影会場で参加者の支援を行った。今年度は3年生が初めて取り組む内容でもあったため、当日の準備に少し戸惑う様子も見られたが、開始時刻前にシミュレーションを行い、昨年同様、交代で場所を変わり、参加者への声掛け、作り方の説明などを行った。平面を使用した作品作りということもあり、スペースの確保などは滞りなく行うことが出来た。(図9～11)フロッターージュそのものに関しては、すでに用意された自然物などを使用する参加者、コインを取り出してこすり始める参加者など、発想の広がりがみられた。完成した作品を色画用紙に貼ることで額に入ったような作品となり、写真撮影コーナーも賑わいを見せた。特に白衣や眼鏡、帽子などをかぶることで、科学者のような気分になれることからほとんどの参加者



が記念撮影をしていた。



図9 会場の様子



図10 写真撮影スポット



図11 参加者に白衣を着せるところ

## 【5】 考察

昨年ワークショップを経験した学生の参加が少なかったことにより、準備段階では戸惑いを見せたが、時間が経つにつれ、声掛けなどに慣れ、柔軟な対応が出来るようになった。ワークショップの内容そのものについては、子どもから大人まで気軽に参加できること、またフロッタージュの面白さに気づき、こちらが用意した素材だけではなく、参加者自身の持ち物を使用する姿も見られ、発想が展開していく様子が見られた。企画展において多様な作品を鑑賞した後だからこそ、自分も表現したいという気持ちが高まっていたのではないかとと思われる。

### (3) 2015年「アニマルこぼしを作ろう！」

#### 【1】 夏の企画展概要「リサ・ラーソン展」

83歳の現在も活躍中のスウェーデンの陶芸家、リサ・ラーソンの活動を紹介する展覧会。彼女はモダン・デザインが主流の時代に、動物や少女など身近なモチーフを温かいユーモアで形にし、驚きをもって迎えられ、当時から高い人気を得た。日本の民藝に影響を受け、粗く素朴な風合いの土を好んで用いたことも、彼女の陶芸に個性的な魅力を与えている。本展は、約230点を展示する国内初の本格的な展覧会で、リサ・ラーソンが毎夏を過ごすサマーハウスのアトリエも紹介し、北欧の自然豊かな制作環境や生活スタイルを通して作家と作品の魅力に迫った<sup>12)</sup>。

#### 【2】 プログラム開発の様子

学生たちにも雑貨等を通して馴染みのあるリサ・ラーソンの展覧会では、多くの動物のキャラクターがみられる。そこで同様のモチーフを、扱いやすい素材で作ることは出来ないかと、思案した。そこで球体のカプセルを活用し、その中に重りを入れた起き上がりこぼしを作り、オブジェとして家に飾れるような作品を作ることとした。重りを一定の量の粘土で作り、乾燥させた後に球体に接着し、球体の表面に半紙を貼っておき、自由に画用紙とお花紙を使用して動物を作るというプログラムを考案した。学生たちは試作を行い、動物のバリエーションを制作した後、撮影をし、チラシを作成した。(図12)

企画が出来上がった後、会期初めに打ち合わせとして美術館に赴き、担当職員から会場の話を聞いた。(図13) さらに展覧会を楽しむツールとして「アニマルこぼしクイズ」を作った。これは学生自らが制作した作品を館内に配置し、写真を撮り、出力したのから場所を聞くクイズで、美術館そのものの魅力を来館者に異なる視点から伝えるというものである。美術館に初めて訪れる学生も多いので、会場を歩きながら撮影をすることで美術館の魅力を発見することにも繋がった。このアニマルこぼしクイズはワークショップ前から展覧会の会期中、美術館エントランスに展示した。

(図14、15)

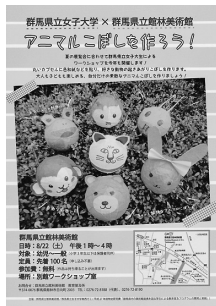


図12 チラシ



図13 打ち合わせの状況



図14 アニマルこぼしクイズのために  
展示作品と撮影を行う学生

### 【3】 プログラム概要

企画展にちなみ、好きな動物をモチーフにした起き上がりこぼしを作る。丸いカプセルにお花紙、画用紙を貼り、自分だけのアニマルこぼしを作るというプログラム。

日	時：8月22日（土）午後1時～4時
対	象：幼児～一般
定	員：100名（先着順）
参	加人数：100名
参	加費：無料
場	所：会議室（当日ワークショップ室から変更）
準	備：お花紙、画用紙、ハサミ、のり、マーカー、カプセル（中に粘土を入れたものをあらかじめ用意）
企	画：アートマネジメントゼミ4年（6名）
実	施学生：アートマネジメントゼミ4年（3名）、3年（10名）

### 【4】 実施当日の様子

当日は13名の学生がワークショップ会場で参加者の支援を行った。リサ・ラーソン展そのものが多くの来館者で連日賑わっているということもあり、ワークショップ当日は開始前1時間ほど前からエントランスに列が出来た。そのため職員が整理券を配布し、時間を30分ずつ区切り、会場に来てもらうように促した。多くの方が並んだため、材料の手配が出来ず参加できなかった人には作り方が印刷されたプリントを渡すこととなった。今回は事前に来館者が見込まれると聞いていたため、学生も大人数で対応することになった。会場では4回の入れ替え時間をもうけ、学生は交代で場所を変わり、参加者への声掛け、作り方の説明などを行った。（図16、17）



図15 アニマルこぼしクイズと開始前の行列



図16 説明をする学生



図17 待ち時間に色を選ぶ

以下は学生が参加者と交流してワークショップの様子をまとめたものである。

- 小学生のグループで来ていたところは、自分達でどんどん作っていたけれど、完成したこぼしの顔の部分が正面にこない子がいて、注意と説明不足だったと感じた。
- 子どもと一緒に作る大人が多く、自分で作りながら子どもに教えてくださったため、全く作れないという子がいなかったことは良かったと思った。
- 花紙を丁寧に貼ったり、細かい所もこだわって作ろうとする人が多くいたものの、皆ほぼ時間内には完成できていたため、丁度良いスケジュールだったと感じた。
- 事前に何を作るか決めてもらっていたこともあり、作業はスムーズだった。
- お手本通りにこぼしを作る人や、オリジナルのこぼしを作る人もいて、自由度が高かったため、見ている方も面白く、参加者も楽しめていたと思う。
- 大人のお客さんも多く、見本を確認したがるお客さんが多かった。
- 小さい子どもよりも、中学生や大人などの作品にこだわるお客さんは30分の間で完成出来ない傾向があった。小さな子どもは、親の方に手伝ってもらい30分で仕上げる事が出来た。
- アートマネジメント演習で行った富岡市立美術博物館でのワークショップでは、時間内に完成できない子どもへの声かけができなかった。しかし今回は、その経験を活かしながらどのように声をかけたら良いのか理解しながら行動することができた。また、6～8人ごとにテーブル分けしたなかでの作業だったため、一人一人に声かけもしやすく、進行状況も確認しやすかった。
- 紙を選ぶ所で人が止まってしまった。しかし途中から外で待機中の方々に廊下で紙を選んでもらうことで、スムーズに席まで案内できるようになったかと思う。
- お客さんは子どもがメインかなと思っていたが、意外と大人の方も多く熱心に楽しんでくださっていたと思う。企画展に来る年齢層が関係しているのかなと感じた。
- 小さい子には糊を塗ってカプセルに紙を貼るという作業も少し難しかったかなと見ていて思ったが、家族で話しながら作ってもらっていたのでよかった。
- 今回のワークショップは、美術館のスタッフさんがお手伝いをしてくださったことと、ゼミのメンバーが多かったので対応に追われることがなくスムーズに対応できた。

## 【5】 考察

定員を100名にし、整理券を配って、30分ごとに25名ずつワークショップ行うことで、学生たちは来館者に集中して一人一人丁寧に対応出来ていた。また、作品の作り方はそれほど難しくはなかったため、おおまかに説明を行った後は参加者が自由な発想で制作する様子が見られた。参加者の中には、子どもだけでなく、大人や高齢者の方も多くみられ、必要に応じて接し方を変えていくことを意識することも多かったようである。本年あたりから毎年のプログラムが定着してきたように感じた。また、100名と多くの方に参加出来るように準備をしているが、それでも定員以上になることに対して今後検討していく事が必要だと感じた。

### (4) 2016年「こねこね！お寿司をつくろう～へいらっしゅい！寿司処たてび～」

#### 【1】 夏の企画展概要「再発見！ニッポンの立体」

日本には土偶や埴輪、仏像や神像、人形、寺社を装飾する彫り物、置物など、信仰や生活に結びついた豊かな造形表現がある。精巧な技術を駆使して本物そっくりな木彫の栗や象牙の貝殻など、西洋美術が得意とする写実表現とは異なる意識がみられる。それらは根付け、水滴、香合など小さな立体に寄せる日本人の感性に特によく表れている。一方で、現代のゆるキャラやマスコットにみ

る簡略化は、だるまや招き猫、各地で大切にされたこけしの造形と結びついている。本展はジャンルを超えた多彩な造形表現によって日本固有の美意識を探る試みである<sup>13)</sup>。会期中には様々な関連プログラムが実施された。

## 【2】 プログラム開発の様子

日本の様々な立体作品を展示するという中で、その中でも多くの人に身近な食品サンプルを取り上げようということになった。中でも子どもから大人まで比較的簡単に作ることが出来、食べたことのあるものとして寿司が挙げられた。ワークショップの時間が限られていることもあり、寿司を予め破損の少ない石粉粘土で作り、それに着色してもらうプログラムを考案した。寿司の種類の設定には学生同士で好きなネタを挙げた後、参加者の多くが見たこと、食べたことがあるものを絞り、さらに形を作るうえで困難ではない、また着色に技術をさほど要しないものにした。その後、5月～7月のゼミを使用して徐々にパーツを制作し、増やしていった。破損したことも考慮し、130個ほど制作しておいた。パーツの形状は学生各々が試作を行い、最も適切な形を選び、統一をはかった。(図18) また、着色の際に考慮すること、アドバイス、絵の具の色数などを決めた。そして、今回は学生が寿司屋らしいパフォーマンスを行うとして、各自で服装や声掛けの練習を行い、当日に備えた。

## 【3】 プログラム概要

企画展では日本の立体造形のひとつである食品サンプルも展示される。そこで、今回は粘土でつくった寿司に着色をし、実物に近い作品を作る。また、学生たちが法被を着て、寿司職人のようにふるまい、来館者に声掛けを行う。図19はチラシである。

日	時：8月20日（土）午後1時～4時
対	象：幼児～一般
定	員：100名（先着順）
参	加人数：125名
参	加費：無料
場	所：ワークショップ室
準	備：すし（石粉粘土で事前に作成しておいたもの）5種、筆、絵具、水入れ、皿、ラッピング用袋
企	画：アートマネジメントゼミ4年（10名）
実	施学生：アートマネジメントゼミ4年（7名）、3年（3名）



図18 用意したしゃり（粘土の状態）



図19 チラシ

#### 【4】 実施当日の様子

当日は10名の学生がワークショップ会場で参加者の支援を行った。昨年からのよりプログラム実施の認知が高まったためか、昨年同様ワークショップ当日は開始前1時間ほど前からエントランスに列が出来たため、職員が整理券を配布し、時間を30分ずつ区切り、会場に来てもらうように促した。会場では4回の入れ替え時間をもうけ、学生は交代で場所を変わり、参加者への声掛け、作り方の説明などを行った。(図20、21、22) 寿司屋のようにふるまうということから、参加者一人一人に入り口でネタを選んでもらい、「へいらっしゃい!」、「まぐろいっちょう!」などと大きな声を出して会場を盛り上げた。

以下は学生が参加者と交流してワークショップの様子をまとめたものである。

- 今回のワークショップでは、お寿司がテーマだったので、寿司屋の雰囲気を出すために、かけ声や衣装にもこだわった。来場者の方もかけ声を聞いて笑っていて、ワークショップのなかにも少し非日常的な雰囲気を取り入れるのも面白いと思った。私自身も新鮮な気持ちで楽しんで取り組むことができた。
- 活動自体は、親子で一緒に作っている方が多い印象を受けた。受付で待っていると、親子でお寿司の見本を見に来て、どう塗れば本物らしく見えるか、一緒に考えている様子が見られ、子どもだけでなく親も真剣になれる内容になっていたのだと感じた。また、「何で作ったんですか?」「お家でも作れますか?」といった質問も多く、今後もやってみたい、と少しでも思ってもらえたことを非常に嬉しく感じた。
- 子どもも大人も簡単に楽しめる内容だったので、親子でいっしょに楽しめて、スムーズに作れていたのも良かった。とくに親が子どもにアドバイスしながら塗っていたのが印象的だった。また家で作りたいという人が何人もいたのも嬉しかった。作り終わったあとの筆や絵の具の片付けも割としやく、よかったと思う。しかし、やはり見本を見ながら塗りたいという人が多くいて、塗り方の説明をわかりやすくする上でも、テーブルに写真やサンプルがあるとよかったと感じた。また、最後に寿司のネタとシャリをくっつけるときに上手く合わなかったり、皿に寿司を乗せるとネタが浮いてしまうといったことがあり、きれいに完成した状態で持ち帰れなかった人が多かったと思うので、そこもあらかじめ考えて工夫できたらよかったと思う。
- 沢山の方に来てもらえてとてもやりがいを感じた。整理券配布の段階で長蛇の列ができており、上手く対応できるか心配だったが、美術館の方の協力もあって人数を区切っていたので制作もスムーズにできたと思う。今回は入り口や寿司キットを渡す時の掛け声、学生の法被やハチマキも雰囲気づくりの一つとして生きていたように感じた。思っていたよりも寿司の種類が最後まで残っていたので良かったが、やはり巻きものが残ってしまったので、もう一手間塗れたり作れたりする部分を作れば良かったのではないかと思う。老若男女問わず楽しんでもらえていたので良かった。
- 整理券配布の時間よりも早くに沢山の人が集まっていて、参加したいと思ってくれた人が多いことを嬉しく思った。内容は子ども向けかと思ったけど、60代のご婦人から「老人会でもやってみたい」とのお言葉をいただき、どの世代でも楽しめるワークショップになったように思う。今回人数制限のせいで出来なかった人も多く、また家でやりたいという人もいたようなので、自宅で出来るように手順や材料を書いた紙などを用意しておけば良かったかもしれないと感じた。



図20 受付の様子



図21 個別にアドバイスをを行なう



図22 準備した絵具と粘土の寿司

## 【5】 考察

回を重ねるごとに学生によるワークショップが周知され、多くの来館者が足を運ぶようになった。チラシを見て、ワークショップのみに参加しに来たという人も多く、美術館での教育普及プログラムの魅力を伝えることが出来つつあるのではないかと感じる。今回は馴染みのある寿司を題材に、だれでも気軽に色を付けることで、食品サンプルのような作品が仕上がる面白さに気づいてもらえたようである。また、この一つの作品から立体の面白さや他にも自身で寿司を作りたいという意識が芽生えた人もいた。丁寧に時間をかけ、一つ一つネタを手作りしたことや、元気な声かけのパフォーマンスをすることで、学生がプログラム開発に主体的に関わり、来館者と交流を深めることが出来たといえる。

## IV おわりに

企画展にちなみ、学生が造形活動を行うプログラムを開発、実践してきた四年間の成果として以下が挙げられる。

一つ目に企画展に関わる普及事業の一つの可能性として、鑑賞者の表現欲求を刺激することに繋がったことである。通常美術館では作品鑑賞のみを行う場合が多いが、作品を見ていくうちに、自身も何か作ってみたいという意識が芽生えることもある。企画展にちなんだ造形プログラムを提示することで、より作品を身近に感じることも出来、ものを作るという行為そのものの喜びを体験することにも繋がる。鑑賞活動から創造的な表現への欲求を高め、二つの活動がより深化していくといえるのではないだろうか。

二つ目に事業を継続することでプログラムの周知が広がり、ワークショップに参加することを目的に美術館に足を運ぶ人が増えたことである。本事業では参加者が多数のためアンケートを取ることが困難であった。しかし、学生がサポートをしながら参加者と交流を図ることにより、どのような目的で来館したのかが見えてきた。ここでは美術館が作品鑑賞の場だけではなく、様々な来館者のニーズに対応することの出来る場として位置づけられてきたということになる。このことは、美術館により気軽に親しみをもって足を運ぶきっかけになっているといえよう。

このような成果は、いずれも一回のプログラム実施までに実践方法を練り、試作を重ね、戦略的な広報<sup>14)</sup>を経ての結果である。これらが成立するにはプログラムの目的を明確にし、大学と美術館職員との連携がスムーズに行われる必要がある。

今後の課題としては、まず連携事業の継続が必須である。事業を定着させることで、周知が広がる。同様に学生が主体だから可能となるオリジナリティーのあるプログラムの開発を行っていく必要がある。そのためには美術館のみでなく様々な文化施設の教育普及事業も参照し、プログラムの

バリエーションを検討していかなければならない。それと同時に常に美術館の教育普及事業とは何なのか、その目的を明確にし、プログラム開発のさらなる充実を図っていくことが挙げられる。

(謝辞) 本事業を進めるにあたって、群馬県立館林美術館長様、学芸員神尾玲子様、松下和美様、熊谷ゆう子様、野澤広紀様、教育普及係齋藤由紀子様、早矢仕智陽様、また教育普及担当職員の方々には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

\*本研究は平成25～28年度群馬県立女子大学特定研究費「群馬県内の美術館における学生による教育普及プログラムの開発と実践」を活用したものである。

## 註

- 1) 拙稿『富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践』群馬県立女子大学紀要53号、2014、p.120
- 2) 武居利史『美術教育の発展は国民的な課題～美術館の教育普及がめざすもの』「美術運動」(Web版)日本美術会、2013、URL：<http://www.artmovement.jp/2013/11/13/> 最終アクセス日2016/09/11参照
- 3) 武居、前掲
- 4) 現行の平成20年中学校学習指導要領では(ポイント、本文、解説等)の箇所に「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」として、「(2) 各学年の『B鑑賞』の題材については、日本及び諸外国の児童生徒の作品、アジアの文化遺産についても取り上げるとともに、美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること。」と記されている。また、「各学年の『B鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。」とある(文部科学省「(資料7) 芸術系教科・科目における指導の改善・充実について」教育課程部会 芸術ワーキンググループ(第7回資料 URL:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/siryo/attach/1371894.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/siryo/attach/1371894.htm) 最終アクセス日2016/10/1参照)
- 5) 文部科学省「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」(平成23年12月20日文部科学省告示第165号)では、「基本的運営方針及び事業計画」の中で「第三条 博物館は、その設置の目的を踏まえ、資料の収集・保管・展示、調査研究、教育普及活動等の実施に関する基本的な運営の方針(以下「基本的運営方針」という。)を策定し、公表するよう努めるものとする。」とある。
- 6) 公立の館では市立、町立の館では少ないが、国立、都道府県立の規模となると対象が細かく設定されている場合もある。
- 7) 文部科学省は平成22年に「博物館の教育機能に関する調査研究 報告書」をまとめている(株式会社丹青研究所、2011年)そこでは博物館の教育機能の向上方策に関する指針を得る「ミュージアム・エデュケーターの養成に関する研修」の在り方や内容をまとめることと、文化庁が実施する予定である「ミュージアム・スタート・キャンペーン(仮称)事業」ことを目的としている。報告の中では「●教育普及事業の理念、基本方針、到達目標などを掲げている館は、少数である●教育普及部門の位置付けが明確でない館が多い●職員の異動や配置換えにより、継続的な事業の推進が困難である●教育普及事業を行う施設や設備が不十分な館がある●教育普及事業関連の予算が削減傾向にある館が多い●教育普及に関する館外研修に参加できない主な理由は、時間・予算・人手不足である」(p.7)といったことが挙げられ、現場の側からみると、実際の実施状況は困難な状況にあることが多いと考えられる。
- 8) 拙稿、前掲、p.115-117参照
- 9) 拙稿、前掲、p.115
- 10) 群馬県立館林美術館 HP「やまとぢから展」参照 URL：<http://www.gmat.pref.gunma.jp/ex/data/13yabuuchi/13yabuuchi.html> 最終アクセス日2016/09/11参照

- 11) 群馬県立館林美術館 HP「夏休み！いきもの図鑑展」参照 URL：<http://www.gmat.pref.gunma.jp/ex/data/14ikimono/14ikimono.html> 最終アクセス日2016/09/11参照
- 12) 群馬県立館林美術館 HP「リサ・ラーソン展」参照 URL：<http://www.gmat.pref.gunma.jp/ex/data/15risa/15risa.html> 最終アクセス日2016/09/11参照
- 13) 群馬県立館林美術館 HP「再発見！ニッポンの立体展」参照 URL：<http://www.gmat.pref.gunma.jp/ex/exnow.html> 最終アクセス日2016/09/11参照
- 14) 館林近隣の子どもたちを主に来館を促すため、8,000枚ほど完成したチラシを美術館職員から、7月下旬に館林市内の小学校全児童にチラシを配布している。また、近隣施設等への呼びかけ、ホームページでの告知等を行い、多くの人にプログラムの周知を行っている。

図の出典：筆者撮影（図1～図22）なお、出典にあたり、学生及び参加者、美術館関係者には承諾を得ている。